

(一) 校難の年、昭和七年

昭和七年は、本校にとって多事多難の年であった。まず、鈴木校長の辞任である。校長告別式は文字通り涙の場となった。駅頭に校歌を大合唱してこの敬愛する校長を送ったのは、五月十日である。第二代校長として迎えた栃内曾次郎海軍大將は、七月八日就任式壇上で倒れた。

栃内校長急逝のあと、専任校長はおかず、三田俊次郎が校長事務取扱に就任した。俊次郎は当時、岩手医専の校長であり、多忙この上もない身であった。したがって岩中への出校はまれであり、校務連絡のため、使丁が定期便のように医専と岩中の間を往復するのであった。

ちょうどそのころ、世は不況時代であった。第一次大戦後の反動不況が長引いていたところへ、昭和四年秋ニューヨーク・ウォール街に端を発した世界恐慌の波が押し寄せたのである。

不況の深刻さは、そのまま本校の応募状況にも反映した。昭和五年には志願者百三十六名、合格者九十名であったが、昭和六年は一挙に半減して志願者六十九名、合格者四十四名であった。志願者の激減は、創設からまだ日が浅い一私立校にとっては、存亡にかかわる大問題であった。もつとも、昭和六年の志願者減は県立校でも同じことで、黒中、遠中など願書提出は定員の半数、同年新設の花中は募集百名に対し志願者が七十名であった。もはや入学難の時代というよりは、募集難の時代であった。

昭和六年十一月、未曾有の恐慌が岩手県を痛打した。銀行は倒産し、富豪巨商で資産を失なう例があいついだ。三田翁の關係する広範な事業もその打撃を受け、岩手奨学会の資産もまた災厄をこうむった。

幸い三田翁の出資によって、岩手奨学会は経営の危機を脱した。だが、生徒の修学旅行貯金は、ついにもどらなかつたのである。この衝撃は大きかつた。信賴關係が、根底からゆきぶられた。修学旅行の夢が破れた生徒の中には、公然と学校の不手際を口にする者もあり、授業料不払いの輩に出る者もいた。

こんなあるとき、試験の不正行為者に制裁を加える事件が発生した。自治会の名においての制裁であつたために、自治会の役員が処分の対象となつた。この処分を不満とする五年生が、ついに同盟休校に入つたのである。十一月半ばのことであつた。この事件は、学校側が処分を撤回したため、数日で落着した。しかし、相互の信賴關係を真に回復するには、かなり時間がかつたようである。徴兵検査のとき、特高の思想調査を受けたという後日談もあるが、この同盟休校に思想的背景はなかつた。

三回生の一人は、当時を回想して言う。

「敬愛していた鈴木校長の退任が、一番こたえた。留任運動が起こり、俊次郎先生や中村市長のところにも行つて応援をお願いしたが、やはりだめだつた。偉人の栃内校長とはたつた一日でお別れしてしまい、校長のいない学校は中心のない感じだつた。銀行パニックで旅行積立金

がとれなくなつて、これも学校不信に輪をかけた。何かとおもしろくないことが続き、けんかざたなどもあつた。制裁事件の処分問題で騒いでいるうちに、盛中とのラグビー定期戦も流れてしまつた。対外試合どころではなかつた。」

(齊藤徳三郎談)

天災か人災か、ともかく昭和七年の岩中は揺れに揺れた。国難になぞらえて「校難」の語ができたのもこの年である。まことに、不幸な時代であつたが、これはまたひとつの試練でもあつた。不撓不屈の岩中魂は、この校難を乗り切ることによつて、いつそうたくましさを増して行くのである。

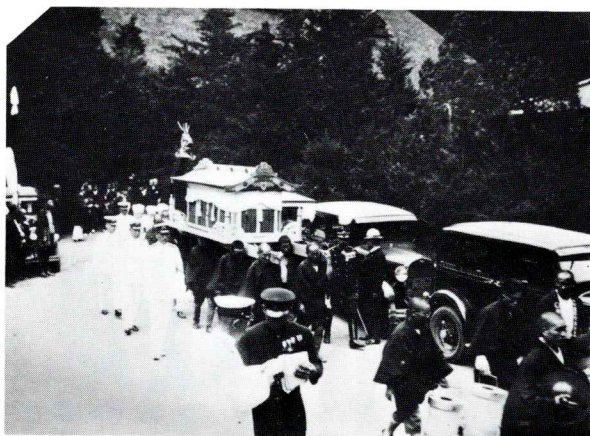
(二) 栃内曾次郎校長のこと

第二代校長には、海軍大將栃内曾次郎が迎えられた。栃内は郷土の生んだ大偉人であつた。またの名を独眼提督とうたわれて世に知られた海の勇将であつた。

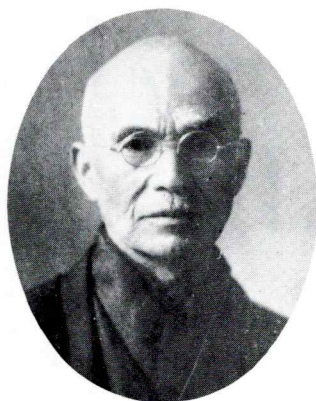
校内外の期待を一身に集めて、昭和七年七月八日就任式に臨んだのだが、不幸、就任式の演説中壇上に倒れてふたたび立つことはなかつた。

栃内は幼少のとき父を失ない、苦難の少年期を過ごしたが、海軍に身を投じて、たちまち頭角をあらわした。戦術にも軍政にもすぐれた才能を発揮し、連合艦隊司令長官となり、本県三人目の大將となつた。岩中校長として迎えられた時は貴族院議員の身でもあつた。

三田翁との出会いが明治三十七年春のことであつた。戦艦武蔵の艦長であつた栃内が、函館の三



栃内校長の厳肅な葬列



校長事務取扱 三田俊次郎



第二代校長 栃内曾次郎

田商店にふらりと立ち寄ったのである。以来両雄は親交を結び、肝胆相照らす仲となった。本校創立の際にも力となり、今また懇請されて校長就任を快諾したのであった。

多忙な大将が教育の先頭に立つという事は実は無理な注文であったと思われるが、二カ月間に五日間は盛岡に来て校務をみ、生徒と寄宿舎に寝食を共にする決意であったという。

四国の北豫中学は秋山大将を校長に戴いて人物輩出の尖端を切った。西の北豫に対し、東の岩中は栃内で行こう、偉人栃内を迎えて学校の一大革新をはかりたいというのが三田理事長の念願であった。これに応じた栃内曾次郎は、七月八日の就任式で、つぎのような演説を行なった。

ただ今三田理事長並に校長事務取扱三田先生よりお話のありました通り私は本日より本校の校長として就任することになりました。今迄とても創立以来本校の母体たる岩手奨学会の理事となつて来たのですが、今度改めて校長として本校を引受けたのであります。理事としても勿論盛岡に住居して時々職員並に生徒諸君ともお目にか、れば良いのですが事情それを許されないのでした。しかし理事長の懇望によってお引受け致しておつたのであります。この度は尚更職員生徒との接触が必要なのですが、東京に於ける種々なる仕事も手放す事が出来ずお断り申したかつたのですが理事長から再三推されましてとうとう承知したのであります。本校は創立以来既に七年、昨年は創立五周年記念祝典も催

三田俊次郎

昭和七年四月に鈴木校長が辞任してから、翌八年三月に佐々木校長が就任するまでの約一年間、栃内校長のわずかな在任期間を除いて本校の学校長事務取扱に就任し難局に当つたのは、義正翁の実弟三田俊次郎であつた。

義正・俊次郎兄弟は二歳違いの長男と次男であるが、父義魏が四十九歳で病没したのち母キヨを助けて一家の労苦を分かち合い、まだ未成年だつた二人の弟と三人の妹を立派に育て上げた。長じてからも二人は、各種の事業を遂行するに当つて常に物心両面で励まし助け合つた仲だつた。

俊次郎が岩手医学専門学校（現岩手医科大学）を設立し、その理事長兼学校長となつたのは、昭和三年二月のことであつた。以後、昭和七年に第一回卒業生を送り出すまでの四年間、岩手病院内の校長室に寝泊りして陣頭指揮に當つたといわれる。本校の学校長事務取扱に就任したのはその直後で、多忙な身をおしての兼任であつた。強情頑固な独裁家と呼ばれたが、義正翁とともに岩手が生んだ巨人であつたことは確かである。

されその時は私も出席して諸君にお目にかかり一場のお話を申したのであった、其の時の話を覚えていた生徒があるだろうか。私は校長として生徒諸君に望む事を簡単に、お話ししたい事が一つある。東北地方ことに岩手県は教育ばかりでなく凡ての文化に於て日本の全国平均に達していないという事である。それは即ち岩手県の人々は努力勉強が足りない、時間を空費して遊んでゐるからである。私は日本に生れて日本に成長した。又二三度西洋諸国にも行って見た。そしていつでも日本人は西洋人に比べて勉強が足りない、時間を無駄にするという事を感じた。日本人のうちでも岩手県人は最も不勉強で時間を空費してゐると思う。この事はかつても当地の新聞に新年の所感として問われた時にも話した事があった。諸君は子供の時からそういう境遇の下にそういう家庭で成長して来たのであるから別になんとも感じないであらう。しかしこの事は一番大事な心すべきことであるからして諸君は新たなる日本帝国を背負つて立つのは我々であるとの自覚の下に大いに努力勉強に努めなければならない。そして国家有用なる国民の一人として自分のためにも国家のためにも名をなすべきである。かく国家有為の人材を養成することが即ち三田理事長の本校創立のご精神であり、又教育の本旨なのである。又私は常に学校に居て諸君と話すことは出来ないのであるが「私の魂はいつでも本校に在るのである。」であるから私のいない時は私の意を体して教頭以下各先生方の教えに従つて一意勉学に努められ

たいと思います。なお現今の教育は余り機械的になつてゐるが私は常にその点にあきたらず思つていたのである。その他まだ話したいことはいくらもあるのですが、それらの話はその折に譲つて今日はこれで結びます。今日は非常に昂奮してゐるのでこれ以上話は出来ませんから諸君はよく私の話を記憶しておいて下さい。級長はノートによく書きとめておいて下さい。

しかし無念にも、柘内校長は七月十二日早晩、岩手病院で眠るような大往生を遂げた。ときに六十七歳。その抱負経緯はついに日の目をみることなく、三田翁の学校革新の願いもまた、一時暗礁に乗り上げるのである。

七月十五日東願寺での葬儀は、空前の盛儀であつた。岩中生は全員参列し、山岸忠兵衛が代表して弔辞を朗読した。

(三) 佐々木哲郎校長の就任

柘内校長の急逝で一時暗礁に乗り上げた学校改革構想は、昭和八年四月に佐々木哲郎校長を迎えて軌道に乗り出した。佐々木校長は東大を出てから青森、宮城、札幌、新潟、愛知など各地の公立校を歴任し、岩中校長の聲がかかった時は長野中学校長であつた。教壇生活の半ばを校長として過ごした佐々木校長は、豊富な経験とあふれる自信のもとに岩中経営に着手したのである。その就任式での第一声は「汝自らを知れ」であつた。哲学科出身らしく、ソクラテスからの出発であつた。

すでに大正十五年に創立された岩手中学校は、着々と精神的な充実をみせ、独特の校風を形成しつゝあつたとはいへ、鈴木校長退職後やや動揺が続き弛緩もあつた。佐々木校長は着任早々、まず体制の整備と充実に力を注いだ。諸規定諸内規は徹底的に洗い直し、改正した。長時間の職員会議がしばしば開かれた。朝礼訓話では岩中精神を強調し、校風振作を叫ぶのであつた。規定は峻厳に適用され、落第生もふえた。怠け者に容赦はしなかつた。昭和八年には牟岐喆雄、山中順三も着任した。牟岐は三田翁から漢学修業を命じられて東都に遊学し、業終えての着任であつた。時代も変り職員室の陣容も変つた。草創期の学園主義は少しずつ変容して行くのである。

宗教育家としての一面を持つ鈴木卓苗校長が人格主義をとなえたように、哲學家としての一面を持つ佐々木哲郎校長も、個性の特色、人格価値を重視した。しかし教育の実践方法において、両校長の間にはかなりの相違がみられた。これを一口で説明するならば、職員や生徒に対する愛情が、鈴木校長の場合は「やさしさ」を基調としていたのに対して、佐々木校長の場合は「きびしさ」を基調にしていたといえる。

佐々木校長の持論によれば、自己の特色と価値を見いだすためには、勤勉努力、内省修養の苦勞を重ねなければならない。日本刀をつくるとき、刀鍛冶は身を清めて神前に雑念を払い、一槌一槌に心をこめて何度もきたえあげるが、教育もこのように、苦難を耐え忍んで自分を千鍛百錬すべきものである。いまや国際関係はますます複雑多難

をきわめ、わが国は未曾有の非常時局に直面している。アジア民族の盟主として、東洋平和を確保しなければならぬ重大使命を帯びている。その日本帝国を双肩になう責任を持つてゐることを、本校生徒の一人一人が真剣に認識する必要がある。決して第二流の人物になつてはいけない。将来の地位境遇は違つても、それぞれの場で、第一流の人物になることを目指すべきである。自己の特色と価値を發揮して人格の完成をはかり、国家社会のために役立つ第一流の人物にならうとするならば、まず手近かな日常生活を、一大決心のもとに革新してもらいたい。

「諸子は生徒として第一の本務たる学業に果して勤勉なりや。」

自学自習の良習慣を養ひ得たりや。

時間厳守と規律節制の点に於ては如何。

本校生徒の風紀振作の状態は如何、校の内外に亘り一般に方正且つ緊張しありや。

本校生徒として、其の特色の以て誇りとするに足るものを有せりや。

勉学修養の道場たる校舎建築物其他一切の器具に対しこれを愛護する精神訓練の実際は如何。



第三代校長 佐々木 哲 郎



佐々木校長愛用のシルクハット

等々。」

これまでの本校の校風のうち、長所美点は残さなければならぬが、また反面欠点短所があればすみやかに刷新改善し、善美健実の校風をつくりあげるため、全校の職員生徒が一致協力することを切望する。これが、第三代の佐々木校長の信念であつた。

(四)そのころの職員・生徒の一断面

威厳があつた佐々木校長 生徒が佐々木校長から教えを受ける機会は、朝礼を除くと、週一回の公民(修身)の時間だつた。校長の授業ということで、教室内は静肅そのものであつたが、その雰囲気は廊下にまで及んだ。最上級生も悪童連中も、校長の声が聞える教室の前を通り過ぎるとき、思わず足音をしのげせた。また廊下で出会うと、職員・生徒ともに端へ寄つて道をあけた。

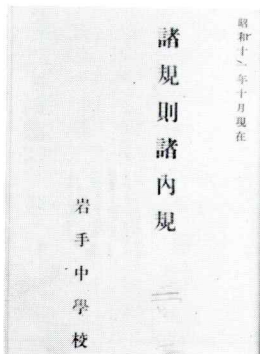
朝礼といい、公民といい、ともに人気のある授業ではなかつたけれども、佐々木校長の身に備わる威厳は、無言のうちに校内を引き締める力を持つていた。いわば、校長らしい校長だつたという

ことができる。

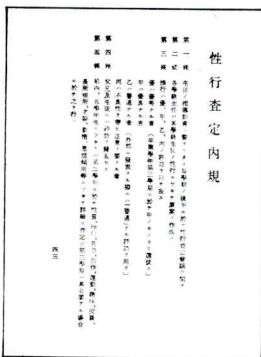
佐々木校長は、進学率の向上に力を注いだ。講堂で生徒たちに話すとき、よく五回生的一条次朗を引合に出した。一条は校風をしたい、岩中を第一志望にしてきた生徒であつた。そして、抜群の成績で海軍兵学校に進んだ。これは岩手としても久々の快挙である。諸君もこの優秀な先輩を見習え、というわけだつた。

こういった教育方針が実を結び、生徒の学力向上はめざましいものがあつた。たとえば八回生の場合、一クラスから金沢修一、佐々木晃、宮静孝の陸士三人組を出している。

職員室の古豪・新鋭たち 昭和八・九年ごろの職員室には、創立当初からの古豪教師や、新しく就任した新進気鋭の教員が混在していた。とくに目立つのは、帝大出のそうそうたる教師がかなりいたことである。理事長や校長が、積極的に優秀なスタッフをそろえようと努めた結果であつた。加えて昭和初期からの不況が、大学を出ても就職口のない情況を生み出していたことも、適材を求める助けになつた。



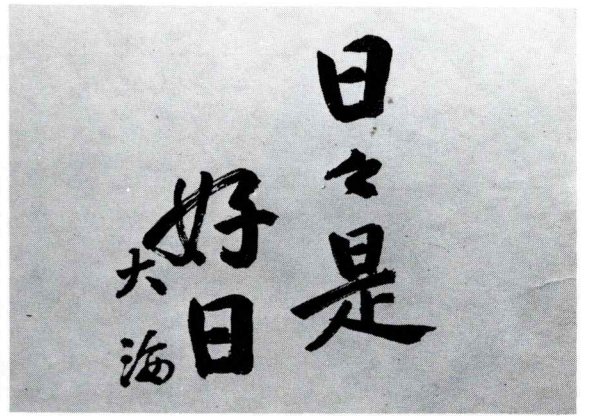
佐々木校長時代の規則内規



同上中の文



羽織袴姿での映画館通いもめづらしくなかった戦前の一時期



佐々木校長揮毫

古豪と新鋭を比べれば、数の上では前者の方が多かったけれども、新鋭の巻き起こす刺激は、職員室にも教室にもいい影響を及ぼした。新進気鋭組の代表選手は、昭和八年四月に着任した牟岐喆雄、山中順三の二人だった。古い教員たちが、ともすれば生徒らのレベルに合わせた授業をしがちな中で、二人は無理にもレベルを引き上げてやろうと補講や添削もどしどしやった。

牟岐、山中はともに一年生の担任となり、寄宿舎から学校に通うという共通点を持っていたが、性格は対照的だった。二松学舎で漢学を学んだ牟岐は硬骨漢であつたし、英語を受持つ山中は、いわゆる慶応ボーイの紳士であつた。だが、そうした性格の違いにもかかわらず、牟岐・山中の名コンビは若い情熱を傾けて佐々木校長の教育方針を実践し、生徒指導の実をあげて行ったのである。

そのころの教師は、生徒をよくしかつた。そのしかりかたにはタイプがあつて、英語担当の五十嵐、山中などは、じわじわとこらしめる方だった。こういうタイプを、岩中生は苦手としていた。国語担当の白井はおおよに、牟岐は簡明直截にというように、人それぞれの持味があり、多面的な影響で人間形成が行なわれた。もつとも、しかられる側にもそれぞれ受け取り方があつて、納得行つたものもあり、あるいはいまなお、うらみ骨髓に及んでいる者もあり、といったところであろうか。

無邪気な悪童たち 教師にそれぞれ風格があつたように、生徒にもめいめいの個性がみられた。

達人先生

開校当初からの数学科教師、太田達人は、文豪夏目漱石の友人だった。漱石はその作品「硝子戸の中」で、彼が怒つたのを見たためしがないと、なつかしさと畏敬の念をこめて達人を描写している。

その達人も岩中教師時代、一度だけ激怒したことがある。うそをついた生徒に對し、「師をあざむくとは何事か、おとつあんを連れてこい」とどなったのである。それまで「さむらい」だったあだ名が、以後「おとつあん」と変つた。

同窓会の発足

岩中同窓会は、昭和八年二月十一日、母校で発会式を挙げていた。連絡用の往復葉書を七十五枚発送したところ、二十数名が出席した。菓子とせんべいとりんごでの旗挙げであつた。その日決められた会則を、幹事の松田巖雄はさつそく印刷して、三回生の卒業式に間に合わせたのであつた。

四月、新校長決定の報に接した同窓会は、ただちに佐々木新校長あてに電報を打つた。「ゴフィンラマツイイテチュウガクドウソウクワイ」。これが、同窓会としての初仕事であつた。

第一回同窓会は、同年八月二十日、母校で開催された。参会者は三十余名、余興に吉田旭蘭を呼んで景気をつけた。旭蘭は、義士会によく来て演じたなじみの琵琶師であつた。

だが、いたずら好きという点では、ほとんどの生徒がそうだった。

何しろ大沢川原の校舎は、すぐ目の前に中津川の川原をひかえている。その気になりさえすれば、ヘビヤカエルをいくらでも手に入れることができた。それを教室に持ち込んで教師を驚かすのが、代表的ないたずらだった。中には授業を投げ出して、泣きながら職員室に逃げ帰る教員もいた。

教室の入口に黒幕をしかけて、教師を袋だたきにするぶっそうないたずらもあつた。皆から恐れられていたライオン先生に、敢然と黒幕をかぶせた豪の者もいた。冬になると、丸いマキをコロ代りに教壇の下に置き、先生をよろけさせて喜ぶクラスもあつた。

茶目で個性あふれる生徒たちも、大別すると、受験勉強組とそうでない組とに分けることができる。そして後者の最大の関心事は、盛中とのけんかであつた。「けんかには負けて帰るな」というのが合言葉で、ラグビー戦やホッケー戦のあとは、たいてい応援団同士のけんかになった。御厩橋のたもととか岩手公園などが盛中・岩中対決の舞台で、授業も部活動も終えて暗くなった夜の七時から八時ごろ、相手グループを呼び出して正座させ、説教で気合をかけた。けんかにもルールのようなものがあつて、流血の乱闘にまで発展することはほとんどなかった。

硬派がけんかに熱中したのに対して、軟派は風紀問題を起こした。当時盛岡の学生社会にも都会の風俗が浸透し、中にはバー、カフェー、飲食店、活動写真館に出入りし、飲酒・喫煙にふける者が

現れた。佐々木校長はこれに対処するために、昭和九年から自治区会の制度を発足させた。これは、生徒を各地区別・班別に分け、班長を中心に校外での操行を正すことを目的とした自治組織であったが、あまり実際活動はみられなかったようである。ただ、戦時中の集団登校などは、この制度の組織を生かしたものであつた。

教師にいたずらをしかけ、盛中とのけんかに専念した悪童連中も、また学業に精を出した秀才連中も、部活動と軍事教練だけはまじめにやつた。軍事教練は優秀な教官に恵まれた上、生徒の側にもいわば戦争ごっこを楽しむといった無邪気な面があり、めきめきと腕を上げて行つた。公会堂前の分列行進などで、一糸乱れぬ団体行動をとることとは、そのまま学校の名声を高める結果をもたらした。これが、昭和十年の秩父宮殿下台臨へと結びついて行く。

軍時色は強まったが、昭和十年代の前半は、まだ学園内にのびのびとした気風があつた。生徒は五年間の中学校生活を、いろいろな過ごしかたで楽しんだのである。

(五) 部活動の躍進

正語部 本校発展期の冒頭をかざつたのは、正語部（弁論部）の活躍であつた。昭和七年県下弁論大会で覇権をにぎつたのである。

十一月二十三日（新嘗祭）岩手日報社主催県下学生弁論大会は岩手医専大講堂に於て開催された。本校からは左の如く弁士を出演せしめ遂



第1回同窓会総会出席者



同窓会発会式、義正翁、その畏友富田小一郎もみえる

ひに一等賞の最高の名誉を獲得す。県下中等弁論界の王者の覇権を握る。吾が部否母校の名誉如何ばかりなりけん。

題 精神昭和日本の確立 五乙目時隆太郎君

(「石桜」三十一号)

翌八年には盛岡高農主催の東北六県中等学校弁論大会で、五年の佐々木長一郎が四位に入賞、岩手医専主催北日本中等学校弁論大会で、四年の丹野寅雄が五位に入賞した。十一月二十六日、岩手日報社主催県下中等学校雄弁大会では、佐々木長一郎が「非常時日本への真の感激」と題して熱弁を振り、一位入賞を果たした。日時に続く入賞で、二カ年連続県下中等弁論界の王座を占めたわけである。昭和九年十月、高農主催東北六県中等学校弁論大会には丹野寅雄が出演、「大和民族の叫び」と題して獅子吼し、二位に入賞した。

いずれも正語会で鍛えられた弁士で、本校弁論部の伝統はこのころ確かな地歩を築いたといえる。

アイスホッケー部 アイスホッケー部は昭和

五年に誕生した。菜園青物市場のコンクリートがその練習場であった。コーチもいなければ、ホッケー知識もなし、あるのは岩中スピリット、熱と意気だけだったという。

昭和七年十二月三十日、高松池リンクでの全国中等学校氷上選手権大会がその初陣であった。一回戦盛中に2-1で勝ち、準決勝で京城師範に9-1で敗れた。県下選手権大会では盛中に4-0で勝ち、準決勝岩師に1-0で惜敗した。年が明けて昭和八年一月二十二日、北日本中等学校アイ

スホッケー選手権第一回大会が高松池で開催された。盛工盛農の棄権により、盛中対本校の準決勝から開始された。準決勝は3-0で勝ち、決勝戦は岩師と対戦、1-1のまま延長戦に持ち込まれた。

(延長戦)

両軍の疲労甚しいので相当の混戦となることを予想したが十二秒に岩師DFの位置の一寸した混戦からLW川崎進んでシュートし簡単にゴールイン岩師に最後の止をさす。後岩師攻めて来たが吾がDF斎藤立花良く防ぎことにGK富手落着いてシュートを良くうけ岩中を勝利に導き遂ひに北日本中等学校アイスホッケー第一回選手権大会の覇権を握り栄えある優勝旗を獲得せり。

(「石桜」三十一号)

本校の獲得した優勝旗第一号はこれであった。その時の本校メンバーは、藤沢、川崎、三島、斎藤、立花、富手である。翌九年の第二回北日本選手権大会でも優勝して、アイスホッケー部の伝統は不動のものとなって行くのである。雌伏の時期もあつたが、昭和十四年には県下選手権、リーグ戦、北日本選手権の全試合に優勝、有史以来の黄金時代を現出した。中村一二、佐々木宗七郎らの活躍がめざましかった時代である。その伝統は戦後にも受け継がれている。

水泳部

草創期に俊豪石原を擁して勇名をとどろかした水泳部だが、その後しばらく鳴りをひそめていた。杉土手の自然プールでは練習もまま

ならず、自前のプールをもつ盛中岩師勢の敵ではなかったのである。優勝の悲願達成は昭和十六年のことであつた。「臥薪嘗胆幾星霜……凱歌を聞きて落ち来る涙を如何にせん」と当時の部報は書きおこしている。七月六日、市内中等学校水上競技大会において各種目に堂々上位入賞、盛商、岩師をおさえて優勝した。続く八月二十四日の市内中等選手権大会でも王座は揺るがず、明治神宮大会予選では寛、大沢らが出場権を獲得、県下全大会に覇をとらえた。

翌十七年七月、城南プールでの糧原神宮並びに明治神宮大会岩手県予選でも優勝杯獲得、寛、村井らが甲子園大会、神宮大会へ出場した。甲子園の大プールにおいて全国一流選手と競い、予選で寛は長距離で四着、村井は短距離で五着、瀬野尾が七着であつた。

昭和十八年には戦局の推移から中央諸大会が中止され、県下諸大会も取りやめとなつた。三連覇を目指す部員には打撃であつた。ただ一つ、明治神宮予選兼東北北海道水上競技大会が盛岡で開催されるとあつて、部員は奮いたつた。八月八日城南プールでの同大会に秋田北海道勢が不参で物足りなかつたが、有史以来の戦績を残して岩中水泳部の名をとどろかしたのである。四百米自由形で寛一位、村井二位。百米背泳で村井(孝)一位、大沢(OB)二位、五十米潜水で黄が一位。百米自由形で岡山四位、足沢(昭)六位、千五百米自由形で村井(莊)一位、瀬野尾二位、大信田六位と各種目に活躍、福中、関中、実業団の追撃をしりぞけた。この年の神宮大会へは中学生は参加でき

「我々は立派に今日の任務をはたしたのだ。そして終に岩中の威力、岩中型の雄大さ、立派さを表し皆を驚かしめたのだ。岩中型などと言ふとおかしいが本校部員の射形態度の雄大さを言ふのである。」

昭和十年は、県下、東北、北日本中等学校大会のみならず県下一般の弓道大会に出場し、出場するたびごとに優勝したのである。あこがれの明治神宮大会には、小田島、富岡、中島が参加し、第二子選まで進出している。

剣道部 剣道部の初優勝は昭和九年七月一日、高農道場での第七回東北中等学校剣道大会の勝利であった。相手は古豪小牛田農林である。決勝戦での対戦は昭和五年以来のことであった。古豪新鋭の対戦、この勝負こそみものと観衆は道場の内外にあふれた。どよめきの中に黒衣黒胴りしい岩中軍は、観衆の興をいやが上にもひくのだった。メンバーは伊藤正男、三浦正夫、目時国男、佐野誠、長谷川信太郎である。戦は2-2と互角にすすみ、最後大将同志の対戦となった、場内は緊張し会場の高農大校庭は風もなく林の如く静かであった。

一進一退、機熟して長谷川の剣は一閃して敵頭上にとんだ……。

「観衆騒然として驚異のうちに、引上ぐる者、迎えるもの皆涙、かくして吾等は強豪小牛田の堅壘を打ち破る事が出来たのだ、かくて第七回東北中等学校剣道大会の栄冠は吾等に帰した。多年夢見し覇業の夢、今こゝに現実に見んとは、

戦全く終り黄昏の靈峰を背にして遥か母校をのぞむとき、吾等只感慨無量……」（部報）

翌昭和十年には、武徳会演武大会、北日本中等学校剣道大会に優勝した。名剣士三浦の活躍が光った年である。六月三十日、武徳殿での演武大会に主将三浦の奮戦は目覚しかった。勝抜高点試合ではそうそうたる二段、三段の強豪を八名もなぎ倒し、集まった二百有余の剣士を断然压倒して優勝し、万丈の気を吐いた。九月二十四日の北日本大会では、決勝横手中と対戦したが、三浦は横中剣士五人をなぎ倒して優勝旗を奪い取った。「苦節は報いられたのだ、げに優勝とは努力したものにのみ与えられる称号である」と昭和十年の部報は結んでいる。

柔道部 柔道部の雌伏期は長かった。優勝旗を目前にして、いくたび長蛇を逸したか分らない。この柔道部にわが世の春が訪れたのは昭和十六年である。十月三日、武徳殿における第十二回明治神宮大会岩手県予選で優勝したのである。黄金時代の開幕であった。この日、第一回戦は盛中と対戦、無勝負のまま代表戦となった。この代表戦が引分けとなり、三分間延長してもまた引分け、ついに抽選となって幸運にも勝ちを拾った。準々決勝、花中に2-1で勝ち、準決勝も盛商に2-1で勝った。決勝戦では岩師を3-1で破り優勝した。殊勲の選手は東根、佐藤（幸）、大志田の三名であった。「ふるえる手で優勝旗をにぎりしめ、今更に優勝の喜びに浸りつつ相擁して泣いた」と部報には記されている。

県代表となった本校勢は講道館における神宮大会でも善戦し、一回戦で神奈川に2-1と敗れはしたが、天下に岩中の名をとどろかしたのであった。

岩手県 対 神奈川県

先鋒 東根 ○ 背負 長嶋（神奈川師範）

中堅 佐藤 △ 弘腰 足弘 横山（横浜商工）

大将 大志田 ○ 優勢勝 伊藤（逗子開成中）

翌昭和十七年、檀原神宮大会岩手県予選でもまた優勝した。一回戦、盛中を3-1で一蹴、二回戦夜中を5-0で降し、準決勝で黒中を4-1で押し、決勝戦では福中を4-0で破って堂々の優勝であった。その時のメンバーは菊池、赤坂（祐）、藤沢、工藤、佐藤であった。檀原神宮大会は八月二十四日、檀原道場で開催された。予選は岩手、神奈川、新潟の三県リーグ戦で行なわれた。緒戦、新潟中学には完敗したが、二回戦、神奈川の逗子開成中学には4-1で快勝した。十七年には後藤伯記念館武道大会にも出場し、赤坂、藤沢、工藤組が関中、黒中、花中、水商を破って優勝旗を手にした。この年は明治神宮大会予選の決勝戦で盛中に敗れたのが唯一の痛恨事であった。必勝不敗への精進は続いた。岩手おろしの寒風ものかわ、朝五時からの寒稽古に汗を流した。技も一段と冴えてきた。昭和十八年には新部員七十余名を擁して意気高らかであった。「山よほほえめ、小鳥よ讚美してくれ、まず市内十人制大会で優勝した。今や真価を発揮する日は来る。烈々たる闘魂火の玉の如し、そして爆発したる戦果を見よ、出場選手を列記すれば高橋（享）、柏原、槻

河原、及川、佐々木(昭)、小山田、佐々木(秀)、菊池(平)、菊池(忠)、佐藤である。まず一回戦は岩商と対戦し破竹の勢とはこの事であろう。石を割って咲いた桜花、9-1とは見事々々。次ぎの盛農も10-0、なんたるこの戦果殊勲甲の凱歌は挙る」(「桜花」四十二号部報) 決勝戦では盛商を6-4で下して優勝した。

七月四日の武徳殿発会式には、六尺余の長身を利する小山田、檀原神宮出場の猛者菊池、檀原明治神宮出場の佐藤といった磐石の布陣でのぞんだ。この日、花中を2-1、岩師を3-0、夜中も3-0と一蹴した。決勝戦では盛商を2-1で下した。個人戦には佐藤が出場したが、花中、宮水、関中、黒中の代表をつぎつぎ得意の釣込腰、跳腰などで豪快にほふり優勝した。連戦連勝まさに黄金時代の到来であった。ただ、うらむべし、戦局の推移はもはや全国大会の開催を許さぬ情勢となっていた。檀原神宮大会は三県大会に縮小され、明治神宮大会もとり止めとなった。目標の全国大会が消えて、「稽古は絶え、風が空しく道場の破れ窓に鳴るのみであった」と当時の部報は悲運を嘆じている。

スキー部 昭和九年は本校スキー部躍進の年であった。少数部員ながら飛躍の一条兄弟や長距離の立花、村井を擁して一躍有名になったのである。

一月七、八日田山での県下中等学校スキー大会において、一条竜彦が飛躍競技で軽く一位となり、一条次朗はスキー破損し転倒しながらも六位に入

った。十籽競走で一条(竜)三位。二十籽競走で立花が二位。二十籽継走では村井、一条(竜)、立花、神が力走して二位、総合では古豪岩手師範について二位の成績であった。一月二十七、八日、県下スキー選手権では、複合飛躍競技で一条(竜)一位、村井五位。純飛躍競技で一条(竜)一位。二十籽競走で立花が一位、強豪連を圧して三つの選手権を獲得したのであった。

二月初旬、岩山スキー場での市民スキー大会では、回転競技に目時(国)一位、二籽競走に村井一位、鈴木(英)三位、八百米競走山蔦一位、飛躍競技一条(次)一位、四籽継走には村井、目時、鈴木、山蔦が出て二位入賞であった。

(六) 秩父宮殿下台臨

昭和十年十月一日、佐々木校長あてに秘親展書が届けられた。弘前市に滞在中の盛岡市長大矢馬太郎からのものであった。

拝啓益々御清祥奉賀候。

陳者

秩父宮殿下同妃殿下には来る十一月六、七、八、九日の四日間に涉り盛岡御滞在各地御巡覧の御予定に承候処、岩手中学校へは特に御臨みなされる事に御内定相成たる哉に洩れ聞き候。誠に御光栄此上もなき次第今日より折角大に御奮励名声を中外に發揮せられん事祈上候右御内報申上候 匆々

大矢拝

佐々木様

これはたいへんなことであつた。「その光栄只々恐懼感激又言う所を知らず」であつた。校舎内外の清掃に、職員生徒の勤勞奉仕が始まつた。記録では、前後八回も放課後の大清掃を実施している。校庭の枯木は伐採新植樹され、玉砂利が敷きつめられ、校舎内外は旧態を脱して面目一新した。

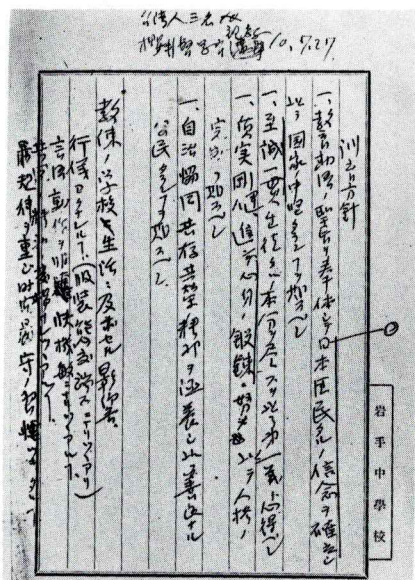
御休憩室の清掃完備せるが如きは、当日畏くも殿下より、「この学校は物質的に恵まれて居る様ですわ」との御言葉を戴き村井教官をして恐懼せしめたる事より推しても量り知るを得べし。(台臨記)

さて当日、十一月七日零時三十分、職員生徒はそれぞれ奉迎の位置につき整列した。理事長、学校長、配属将校は玄関正面前の位置に立ち、一同高鳴る胸を静め、威儀を正し、肅然として御着を待った。

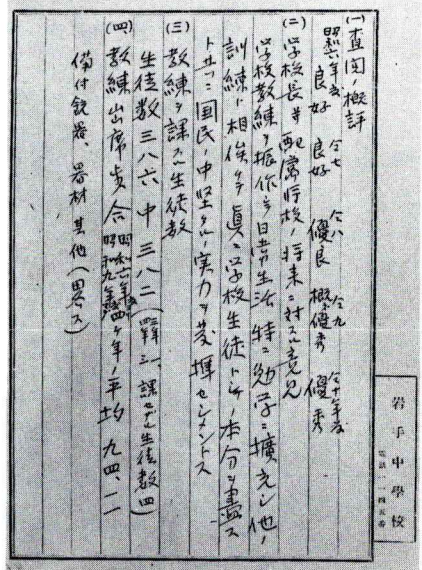
此の時生徒部隊の右翼に当り高橋喇叭手の吹奏する「君ケ代」啾唳たる音を伝ふ。続いて「捧げ銃」の号令あり。やがて、滑るが如く御召自動車校門に入られ、一同最敬礼裡に、玄関前に御着遊ばさる。殿下に於かせられてはいとも御軽やかに御降り立たせられ、理事長、学校長、配属将校に挙手の礼を賜ひ、直ちに学校長御先導申し上げて御休憩室に入らせ給ふ。

(台臨記)

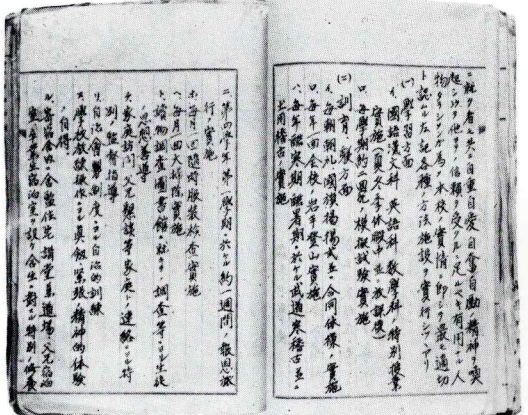
学校長、配属将校は夫々本校の訓育状況、教練状況を言上して御前を退下した。学校長言上文の



佐々木校長がしたための言上文章稿



同上



秩父宮への言上文控、当時の学習訓育概の実態が詳細に盛られている

この時の配属将校は村井権治郎中佐だったが、その学校教練状況書の中には次のようにある。

教練と訓育との連繫状況

校長以下職員と配属将校との連繫は円満緊密にして現在実施しつゝ、ある事項左の如し。

- 1、配属将校は絶えず職員と連繫し自ら生徒の動向を観察すると共に生徒に面接して逐次個人指導を実施しつゝ、あり。
- 2、配属将校は他の職員の学科に臨場し又職員も教練及野外演習時に於ける生徒の状態を観察し且配属将校の与ふる注意事項は職員に於て敷衍して徹底を図り其の実行を監督し相協力して指導に努めつゝ、あり。
- 3、配属将校は寄宿舎生活等の体験に依り勉めて生徒に親炙し和親を図ると共に其の真相を把握して個人教育並に一般趣嚮を判断するの資料となしつゝ、あり。
- 4、毎月一回服装検査及校内の大掃除を励行し全職員校規の肅正に努力しつゝ、あり。
- 5、朝礼時学校長の許可を得、勉めて全校生徒

一節には次の様にあり、当時の状況がしのばれる。「教練実施以来訓練の効果は着々と実績の上には現はれて参りました。其の一つと致しまして生徒は常に不言実行、進んで範を垂れんとするの堅い信念をもち、其れを実行に現はす様になつて参りました、日常生活に於きまする、言語態度動作等も夫々明快、端正、機敏に赴いて参つた様で御座います。特に服装に対する関心留意も相当徹底致したかに認められます。

尚、国防観念涵養の一助にもと思ひまして制服を国防色に改め本年十月先ず第一学年より着用致せました。来年夏服着用の六月一日を期しまして全校一斉に国防色制服に統一することに致して居ります。

全般的に申しますれば生徒は漸次真剣従順になつて参りまして特に勤労奉仕の精神が徹底致し、克く協力一致事に当ります美風が培はれて居ります。これを本校校風の特色の一つと致しまして、将来益々其の發揚に努むる考で御座います。」

村井中佐は「御視察を仰ぎ奉りて」と題する感想を寄せているが、末尾を次のように結んでいる。

又教練実施に就ては幾多の向上改善すべき点があつたが、生徒が克く緊張し（此日欠席者病氣のみにして七名）真剣に実行し平素以上の成果を取めたに鑑み「為せば為る」との信念を一層強めたと共に将来此意氣此矜持を保ちて自奮自励必ずや本校設立の趣旨を貫徹せねばならぬとの決意の片鱗を窺ひ知る事を得たにつけても更に此光栄を永久に記念するために校風の刷新其他形而上下の記念事業を考案企画せねばならぬ事を痛感する次第である。

ご親閲の感想を、生徒は次のように書いています。

秩父宮殿下を迎え奉りて

四年 皆川 弘

昭和十年十一月七日、お、何たる光栄の日ぞ。何たる感激の日ぞ。即ち我が郷土兵より成る歩兵第三十一連隊の第三大隊長として、在します所の、秩父宮殿下に於かせられては、畏くも岩手県下の、学校教練御視察を仰せ出され、その優秀校たる盛岡高農、岩手師範、岩手中学校、盛岡青年学校に、台臨遊ばさる。

この日、早くも時は進みて、台臨の時刻とはなりぬ。

我等が赤誠こめて、捧げ奉る着剣捧銃の中を御召車肅々と進み給ふ。この間、殿下に於かせられては、畏くも拳手の礼を賜ひぬ。

しばし御休憩の後、校長先生の御先導にて、玉歩を校庭に進ませ給ふ。

この日、危ぶまれたる天候も、この光栄に感激してかからりと晴れ、東よりは陽光さへもさし始め、我等岩中生の栄誉ある、この日を祝福するかの如く見へぬ。

課目は進みて、我等四年生の射撃姿勢となりぬ。殿下は特に、我等に御目を注がせ給ひ、始終玉歩を、こ、かしこ、と進めさせられ、我等生徒の為す技を、常に、玉顔御うるはしく、台覧あらせ給ひぬ。お、この辺鄙の地に、金枝玉葉の御方を迎へ奉りたるは、何たる光栄ぞ、我生けるしるし有り。

我が念頭にあるは只、「一死報国」の四字のみ。時は進みて、再び御召車は「君ケ代」の喇叭吹奏裡に、盛岡駅に向ひて進み給ひぬ。

校長以下職員生徒一同、はては使丁に到る迄この光栄に感激してか、この日のみは皆、晴れやかに輝きて見ゆ。

この時にあたりて、「みたまわれ生けるしるしあり天地の、栄ゆる時に、あへらく思へば」の作者の心、わが胸に迫り、万感、そぞろに満ちて言ふ所を知らず。

傍なる清流、中津の流れも、大ひなる櫂も、心なきものとは言へ、今の我には、歡喜に、みちみちたるかの如く見ゆ。

この時、我思ひぬ、「殿下に対し奉り、この、御鴻恩に報ひん為に献身的努力をなさん、而して、天皇の為、皇弟の為、奮闘せん」と。

嗚呼。わが一生の幸福、光栄の日、万感、胸に迫りて文つひに心のま、を記す能はざるを惜しむのみ。

五年 三浦 友三

嗚呼、永遠に忘れる事の出来ぬ日は菊花薫る十一月七日であります。呱呱の聲をあげて僅か十年の歴史を有する一私立中学校である本校を畏くも台臨の光栄に浴させ給ひし、

秩父宮雍仁親王殿下の御為め我等四百の健児はた、此の空前の光栄に感激恐懼せし餘り言ふ所を知りませんでした。

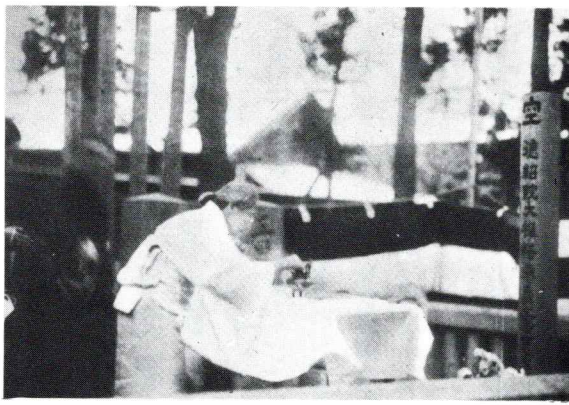
始め本校正門前迄敷きつめた玉砂利の上をば御召自動車にて我等の捧銃に御答礼あらせられつ、校内に入らせられ全校生徒の教練を親しく御覧遊ばされたのであります。此の時雨模様もおさまり天晴れ秋の日は燦として輝き渡り紅葉は晴れの錦と見まがふばかりでした。殿下には

終始一貫御熱心に細心の御注意を拂はれながら御覧遊ばされ我等の目前数尺の箇所迄にも御足を進められました。私は、殿下の御眼差の強く御慈愛に富ませられて居られるのを拝して、頭の下のを感じつつも台覧に供する分隊戦闘教練と小隊密集教練の参加者の一員として全精神を緊張させつ、努めました。最後に、殿下の御直前二三歩の箇所了へた時目のあたり押し奉る事を得た、涙の止めどなく溢れ出づるのを禁ずるを得ませんでした。

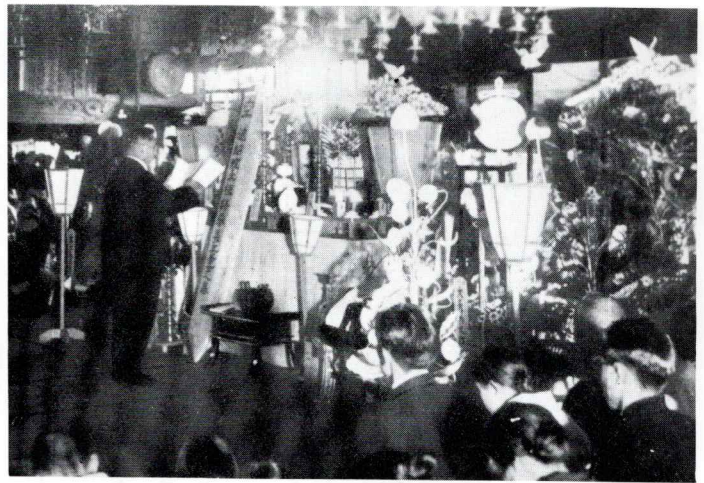
思へば維新の際は賊軍として敵対し奉った東北に、又打ち続く天災になやむ此の辺鄙な東北の地へ、金枝玉葉の尊き御身を以て成らせられて数多き光栄を頒ち給ふ其の広大なる御徳を仰ぐ時我等は此の無上の光栄を現在のみの光栄として、なく永遠に続く光栄として忘れざるため、なほ一層の精進をなして此の岩手を此の東北を此の日本をより良くして、皇恩の万分の一にも報ひ奉らんと決意するものであります。

(七) 三田義正翁逝去

昭和十年の歳末、義正翁はふとしたカゼがもとで病床の人となった。たまたま十二月二十五日は理事長主催の忘年会が予定されていた。当日、佐々木校長以下の面々が会場に集まったが、理事長の姿が見えない。いつも人一倍時間にやかましい方だけに、今日はいったいどうしたことかと、かすかな不安が参会者の胸をかすめた。やがて小泉理事と佐々木校長の口から、理事長がカゼ気味で



多くの人々が焼香して故人の冥福を祈った



義正翁葬儀に際し、弔辞を捧げる石黒知事

あり、医師の注意もあるので、今日では出席されないと伝えられた。

二十六日、理事長は熟睡のもようであったが、体温は三十九度二分の高熱に達した。二十七日に熱が三十七度二、三分に下がり、周囲はホッとした。二十八日、かなり元気になり、見舞に訪ねた牟岐喆雄に向かって、「君、生まれるのは簡単だが、死ぬのはなかなか楽ではないぞ」と、笑いながら話したほどだった。

二十九日の早朝、内丸から「すぐ来い」との電話があり、牟岐、山中両名がかけつけて病室に飛び込んだ。そのとき翁は、第一回の心臓性喘息で苦しんでいる最中であった。緊張し切った佐藤病院長が、看護婦を低く、しかし力のこもった声で励ましなが、理事長のきらいな注射をしていた。このカンフル二十本がきいたのか、七時ごろようやく沈静し、苦しみも薄らいだ。

しかし同日午後五時ごろ、二回目の発作が起り、六時前後に落着いた。九時には子息の義一夫妻が急を聞いて東京からかけつけ、枕もとで看護にあたった。子息は東大医学部の呉博士と、足沢医学士を伴ってきたが、呉博士の診断では、「三十日の午前二時ごろまで、この発作が来なかったら危険の域を脱するかもしれない」ということだった。その時刻の来るのをおそれるような、また早く過ぎ去ってほしいような気持のうちに、数時間が過ぎた。幸いその時刻が来ても、発作はあらわれなかった。

三十一日の午後二時になって、三回目の発作が襲った。二十分ぐらいで沈静したが、翁はこのと

き死を覚悟したのか、枕もとの家族に対して、遺言を口述し始めた。

言々句々、迫力に富んだ、しかも理路整然、襟を正さずには居られない翁の最後にふさわしい厳肅そのものの遺言でありました。「もう俺は言ふべきことは言った。今死んでも遺憾なことはない……」全く之が死出に旅立つ人の言かと思はるる程迫力のあるものでした。

(牟岐喆雄「病床日記」)

ついに、昭和十年十二月三十一日午後八時十五分、一代の英傑三田義正翁は不帰の客となった。行年七十五歳であった。

翁の葬儀は、風凍る正月四日午後一時二十分から、久昌寺でしめやかにかつ盛大に営まれた。

参列者は七、八百名に達し、まれに見る盛儀と報じられた。生徒代表の弔詞を掲げる。

弔詞

謹ンデ我ガ岩手中學校産ミノ親故三田義正翁ノ靈ニ申シ上ゲマス。

時ハ維レ昭和十年ノ師走モ押シツマツタ卅一日午後八時十五分我等ガ三田義正翁ハ明日ノ慶ビヲ見ズシテ溘然ト他界セラレマシタ。此ノ世ノ百八煩惱ヲ鐘ガツキ出ス一杵二杵ニ汚レタ年ノ一切ヲ清算シヤウトスルソノ直前ニ空シク枉席ノ上ニ逝カレタ三田翁ニ、我等ハ地上デノ最後ノオ別レヲ申シ上ゲマス。

恭シク惟マスルニ、「不言実行」トイヒ、ソ

シテ又最後に遣サレタ「仕事ニ努力シ世ノ爲盡セ」ノ數言ハ寔故翁ノ血デアリ肉デアリマシタ。

又翁ハ御自分ノ業務ニ對シテハ身ヲ殺ギ骨ニ及ビ、眞ノタメニハ身モ惜シミ給ハヌ御精勵ブリト親ノ如キ御親切トヲ以テ稍モスレバ輕卒ニ走り勝ちナ我等ヲ能ク御指導御鞭撻下サイイマシテ一意國家有用ノ材トナルベキ路ニ拍車ヲカケテ下サイマシタ。今ニナツテ故翁ノ面影ヲ憶ブニ付ケ一層哀悼ノ念ニ堪ヘズ涙滂沱トシテ流ル、ヲ如何トモ致スコトガ出來ナイ次第デ御座イマス。

ア、故翁ヨ！ 故翁夙ニ郷土教育ノ大業ニ力ヲ盡クサレ育英ノ大旨ノ下ニ老驅ヲ提ゲテ起タレマシタ。郷土百般ノ氣風ノ革新ハ一ニ懸ツテ翁ノ胸中深く秘メラレテキタノデシタ。實ニ躍進岩手ノ大綱ヲ握ルモノ——ソレハ翁ソノ人ニ他ナラナカツタノデス。

噫、併ルニ惜シイ哉。惜シイ哉、鴻業半バデ翁ハ他界セラレマシタ。如何ニ號泣シマシテモ再ビ故翁ノ御尊顏ニ接スルコトハ出來ナクナリマシタ。故翁ノ御姿ハ今尚眼前ニ髣髴ト彷徨ヒ、耳底ニハ御聲ノ餘韻ガ響イテ參リマス。

餘リニモ無常ナル人生ヨ。夫ノ祇園精舎ノ鐘ノ聲ハ諸行無常ノ響ヲ孕ミ、生者必滅、會者定離ハ此ノ世ノ定メトカ申シマスガ、有爲、轉變ノ餘リニモ烈シイノニ我等ハ唯天命ノ傳キヲ痛嘆スル許リデアリマス。

故翁亡キ後ハ我等一同一意學徳ヲ研鑽シ國家有用ノ材トナリ故翁在世ノ高恩ニ報ヒ奉ル覺悟デゴザイマス。

サラバ在天ノ英靈ヨ。――

此ノ切々タル地上ノ最後ノ別レヲオウケ下サイ。英雄タラザルト同時ニ又大英雄タル三田義正翁ノ御魂ニ對シマシテ岩手中學校四百ノ生徒一同ヲ代表シ茲ニ弔詞トイタシマス。

昭和十一年一月四日

岩手中學校生徒代表

鶴川 四郎

葬儀に参加した本校関係者の脳裏には、あまりにも大きな存在であった三田義正翁の、生前におけるおりおりの元氣な姿が焼きついていていた。勤勞園に、メリヤスのももひきをはき、紺のきやはんに尻はしよりといういでたちで現れ、率先して汗を流したこともある。銀行パニックにも動じなかつた翁は、古武士のような風貌の持主であつた。入学式のあとで、「これは一年生か、偉くなれ」と語りかけた日もある。寄宿舎に立ち寄つた折、「外とうを帽子掛にお掛けします」と申し出た寮生に「いい」と答え、「みんなは元氣でいるか」と祖父のやさしきでたずねた。秩父宮殿下台臨の日をひかえ、大掃除をしていると「やあ皆さん、ご苦労、ご苦労」とねぎらい、校長に「生徒の働きぶりには恐れ入りました。あとでほめてやってください」と喜んでいた。その翁の元氣な姿にふたたび接することはできなくなつたが、創立者三田義正理事長の思い出とその精神は、学園とともに永遠の生命を持つにいたつたのである。

(八) 思い出に残る年中行事

寒稽古 毎年一月中・下旬の酷暑のころ、二

週間にわたつて柔道と剣道の寒稽古が行なわれた。早朝午前五時に始まるので、それに出るためには寒さをがまんして暗いうちに起きなければならなかつた。当時、柔道・剣道は正課になつており、

生徒はそのどちらかを選んで、寒稽古に精を出した。佐々木校長も姿を見せ、教師たちも柔道着をつけたり、竹刀をにぎつたりして多数参加した。

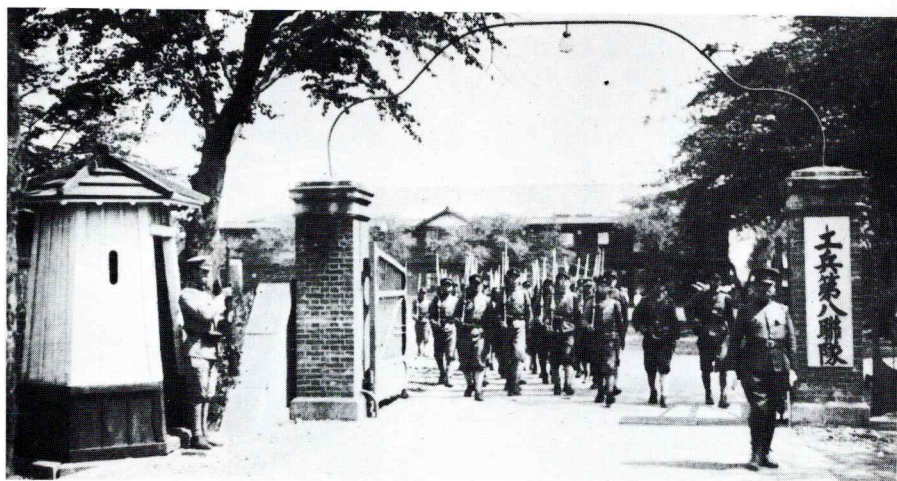
職員・生徒を通じ、有段者がかなりいた。中には、日ごろいじめつける先生を相手に選び、このときとばかりやつつけて溜飲を下げる生徒もあつた。

二週間の寒稽古が終ると、汁粉が出た。また皆勤者は、メダルと賞状をもらつた。冬の朝、毎日早起きするのはたしかにつらかつたが、稽古を終えたあとの気分は格別だつた。卒業後も折にふれて思い出す、印象的な年中行事であつた。

兵営宿泊

戦前の教育は、軍国主義的な色彩が濃かつた。その傾向が一段と強まつたのは、大陸への進出が本格化した昭和七、八年ごろからである。学校行事として、五年生を対象とした兵営宿泊が実施されるようになったのも、その一つであつた。場所は、いまの市内青山町にあつた騎兵二十四連隊の兵舎や、弘前の歩兵三十一連隊の兵舎で、期間は四、五日間であつた。

たとえば昭和八年六月に行なわれた兵営宿泊について、ある一日をとりあげてみると、つぎのよ



兵営宿泊を終えて営門を出る一隊

うな具合である。

その日の課目は、実弾射撃と夜間戦闘教練であった。朝五時に起床して礼拝、朝食、寝台の整頓をあたわだしく済ませ、各自飯ごうに昼食をつめる。それを背のうにしっかりとつけ、六時半に営門を出た。天候は快晴である。広大な観武ヶ原の練兵場を通って滝沢の射撃場に向かう道すがら、声をはりあげて軍歌を高唱する。小一時間ほどで目的地に着いた。

教官からの注意を受け、さっそく実包射撃を開始された。実弾を使うのは皆生まれ始めての経験だったが、それにしてもかなりの点数をあげる生徒もいた。アカシヤの木かげで昼食をとり、午後も射撃が続けられる。四時前に終了し、帰途についたけれども、宿舎に帰ったからといって休めるわけではない。夜間戦闘教練前に、銃の手入れや飯ごう炊さんの材料受取り、分配と仕事がつまっている。

飯ごう炊さんの場所は、観武ヶ原の南側の工兵作業場だった。各中隊ごとに炉を切ったりたき木を拾ったり炊事をしたりと楽しい作業をし、夕食をとった。すっかり暗くなった午後八時ごろ、夜間戦闘の演習が始まった。体に疲労感がしのび寄るが、同時にものめずらしい体験でもあった。訓練を終えて兵営に帰ったのは夜の十一時、一日の疲れがどつと出て、寝台に横になったとたんにすぐ寝つく者が多かった。

運動会

本校の運動会の始まりは、昭和六年十月十六日である。開校式の翌日、開校記念大運動会として、岩手公園広場で行なった。最上級生が一切を計画し、開催したという。それから毎年、秋の盛岡名物として市民に親しまれたが、昭和十一年を最後に、公園広場の運動会は終わった。昭和十二年には時局がら、経費を節減して国防献金に回し、運動会は原野横断競争に代えられた。

公園での運動会のもようを、第六回運動会を例にとつて再現してみよう。まず朝礼があり、訓示と準備体操が行なわれた。最初の競技は百メートル

競争で、ピストルの音とともにレースが展開される。だれかが転んだが、すぐに起きてふたたび走る。岩中スピリットだ。拡声器から音楽が軽快に流れ、観衆の数もふえてきた。

四変レースは、動物のまねをして走らなければならぬ。四つんばいになったり、跳んだりといそがしい。首からスッポリ袋をかぶった猫レースでは、招待席に勢よく突入する者もいる。関所越えなどという競技もあった。

昼休み前に、体操部の演技が披露された。器械体操であるが、逆車輪などの妙技に見物人は皆感嘆して息をのむ。

午後は観衆の数もぐつとふえる。東海道五十三次はカゴで行くレースだが、勢よく走るのでカゴから振り落される者が続出し、見物人の爆笑を呼ぶ。変装レースは岩中独特のもので、中国人、八百屋、高校生、看護婦、大西郷など、いずれも珍妙な姿である。タンプリングの演技も岩中の得意な種目で、ダグラス、トロフィ、ピラミッドと、軽業そこのけの美技がくり広げられて行く。

プログラムの最後のほうには、各種のリレー競技が並んでいる。石桜会各部リレーで、ラグビー部が一位、庭球部が二位を占めた。小学校リレーや職員リレー、学年リレーなど、いずれもたいへんな声援がとぶ。しかし圧巻は、何といつても市内中等学校招待リレーで、この年は盛中がトップの座を確保している。

岩手公園広場の運動会は、生徒にとつて大きな楽しみであったばかりでなく、市民の岩中に對する認識を深める上でも、意義のある催しだった。